

令和八年度 全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

知事賞

優秀賞

中央審査

入選

「温泉の街に生きる僕たちの責任」

松山市立鴨川中学校 三年

きのした 木下 けいご 圭悟

「ふうー」と温泉で息を吐く。僕の至福の時だ。「にっほんの温泉百選」に選ばれている道後温泉。全ての施設で源泉かけ流しをしており、十八本からなる源泉を分湯場に集め、そこで複数の源泉をブレンドして、温度を約四十二度に調整してから、各公衆浴場や旅館に配湯しているのだ。

「地球の恵み」である湧き出る温泉。しかし、一つの疑問が浮かんだ。僕の住む松山市では、毎年深刻な水不足が心配されている。だから、その温泉を水不足に活かせないだろうか、と考えたのだ。

調べてみると、そんなに簡単なものでは無かった。道後温泉の一日辺りの総湧出量は二千トンで、松山市の一日の給水量は、十五万から十八万トンにもものぼる。道後温泉の全てのお湯を注ぎ込んだとしても、市全体の水の需要の約一％にしかない。しかも、道後温泉は「アルカリ性単純温泉」で、肌にはすごくいい成分が含まれているが、これをそのまま飲み水や生活用水にするのは難しい。他にも、温泉成分が水道管に付着して詰まったり、金属を腐食させたりするリスクがある。温泉を「真水」に近い状態まで洗浄するには、膨大なコストがかかる施設が必要になってしまう。

かつて道後温泉も、お湯が止まりかけた歴史があり、今の「分湯場」での一括管理は、お湯を使いすぎないように守るためのシステムでもある。生活用水として大量に使ってしまうと、今度は松山市の大切な観光資源である温泉そのものが枯れてしまうリスクがあるのだ。過去の大渇水の時、道後温泉は助ける側ではなく、真っ先に営業時間の短縮を迫られた側だった。温泉を薄めるための「埋め水」や、体を洗うた

めのシャワーには普通の水道水を使っているから、ダムが干上がると温泉施設も満足に営業できなくなってしまう。

そういったことから、「道後温泉」を生活用水として活用することは難しいのだ。大切な我が街の水を守る為には、僕達一人一人が考えていかなければならないと、改めて感じた。

道後温泉を守る前提として、松山市の渇水対策や豪雨災害を考える必要がある。二年前に僕の住む吉藤川では、ひどい豪雨災害が起こった。更には最近のニュースで、吉藤川でクレソンが大量発生していることを知った。「みどりのじゅうたん」と言われ、見た目はグリーンが広がってキレイに見える。しかしクレソンが密集すると川の抵抗が増えて、水の流れるスピードが極端に落ちる。流れが悪くなると、同じ量の雨が降っても水位が上がりやすくなり、あふれてしまう危険性が出てくる。クレソンが異常に増えるのは、家庭から出る「生活排水」に含まれる窒素やリンが、彼らにとっての「ごちそう」になっているからだ。これらを除去するために、「食べてみてはどうか？」と考えてみた。しかし、排水には大腸菌などの細菌や、洗剤の成分、道路のアスファルトから溶け出した成分なども混じっている可能性がある。クレソンが水をきれいにする過程で、そうした有害な物質を自分の中に蓄積している可能性もゼロではない。そういったことから、食用として、クレソンを除去することは難しい。

限りある資源の水を守る為に、僕は今できることを考えてみた。一つ目に、洗剤を使いすぎない。すすぎの水を減らすことで、川の栄養過多を防ぐことができる。二つ目に、河川清掃イベントなどへ参加する。自らが行動を起こすことで、少しでも川をキレイに保つことができる。三つ目に、節水情報を周囲とシェアする。「ダムの貯水率が下がってきたね」「こんな節水方法があるよ」と家族や友人と話すだけでも、街全体の危機意識が高まって、結果として大きな節水につながる。

大好きな道後温泉を守るため。大好きな松山市の水を守るため。限りある水を大切にすることで、僕たちの責任を果たしていきたい。